

日本プロレタリア文学集・40



本プロレタリア文学集・40

プロレタリア短歌・俳句・川柳集

日本プロレタリア文学集・40

プロレタリア短歌・俳句・川柳集

定価 二八〇〇円

一九八八年十一月三十日 初版©

発行者 山 本 功

発行所 鐵 新日本出版社

〒151東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六
電話 (〇三) 四二三一八四〇二(営業)

(〇三) 四三三一九三三三(編集)
振替 東京三 一 一三六 八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN4-406-01686-4 C0392

日本プロレタリア文学集・40

プロレタリア短歌・俳句・川柳集

目次

プロレタリア短歌		五
プロレタリア俳句		三二
プロレタリア川柳		三五
解 説		碓田のぼる・谷山花猿・岡田一と・四〇五
収録人名索引		巻末

プロレタリア短歌

石川啄木

はたらけど
はたらけど猶わが生活樂にならざり
じつと手を見る

田も畑も売りて酒のみ
ほろびゆくふるさと人に
心寄する日

あわれかの我の教えし
子等もまた
やがてふるさとを棄てて出づるらむ

かなしきは小樽の町よ
歌うことなき人人の
声の荒さよ

平手もて
吹雪にぬれし顔を拭く
友共産を主義とせりけり

（以上、一九一〇年十二月刊歌集『一握の砂』より）

新しき明日の来るを信ずという
自分の言葉に
嘘はなけれど――

何となく、
今年はいい事あるごとし。
元日の朝、晴れて風無し。

百姓の多くは酒をやめしという。
もっと困らば、
何をやめるらむ。

子を叱る、あわれ、この心よ。
熱高き日の癖とのみ
妻よ、思ふな。

その親にも、
親の親にも似るなかれ――
かく汝が父は思えるぞ、子よ。

「労働者」「革命」などという言葉

聞きおぼえたる

五歳の子かな。

友も妻もかなしと思うらし――

病みても猶

革命のこと口に絶たねば。

やまい癒えず、

死なず、

日毎にこころのみ險けわしくなれる七八月ななやつきかな。

(以上、一九二二年六月刊歌集『悲しき玩具』より)

七月二十七日朝 (明治四十三年歌稿ノートより)

赤紙の表紙手ずれし国禁の書よみふけり秋の夜を寝す

ことさらに燈火を消してまじまじと革命の日を思いつづくる

九月九日夜 (同前)

地図の上朝鮮国に黒々と墨をぬりつつ秋風を聞く

明治四十三年の秋わが心ことに真面目になりて悲しも

常日頃好みて言いし革命の語をつつしみて秋に入れりけり

秋の風われら明治の青年の危機をかなしむ顔我が顔になでて吹く

時代閉塞の現状をいかにせむ秋に入りてことにかく思うかな

土岐哀果

Kimi omou kokoro ni niru ka,――

Haru no hi no

Tasogaregata no honokeki akarusa !

(きみ おもう ころろ に なる か――)

はる の ひ の ほのけき あかるさ！
たそがれがた の

Kimi wo omou,――

Yama no Kemuri no Hibiki sae,

Kikoyuru hodo no shizukeki yûbe.

(きみ を おもふ――)

やまのけむりのひびきさえ
きこゆるほどのしずけきゆうべ)

Tsuma wo mochi,

Ie no Aruji to naru koto wa,

Kaeranu-tabi ni yuku gotoki kana!

(つまをもち

いえのあるじとなることは
かえらぬたにゆくごときかな!)

(以上 一九一〇年四月刊『NAKIWARAI』より)

ソファの上(一九二二年二月刊歌集『黄昏に』より)

指をもて遠く^{とど}辿れば、水いろの、
ヴォルガの河の、
なつかしきかな。

クロポトキンの『パンの略取』を、
半ばまで読みしが——その後、
読むひまのなし。

いまもなお、青き顔して、
革命を、ひとり説くらむ。

ひさしく逢わず。

その前後(同前)

わが友の、寝台^{ねだい}の下、

艶より、

国禁の書を借りてゆくかな。

日本に住み、

日本の国のことばもて言うは危うし

わが思う事。

手の白き労働者こそ哀^{かな}しけれ。

国禁の書を、

涙して読めり。

別れては、同志に愧^はじぬ

ひとり、わが、弱く、哀しく、

詩をおもう心。

焼趾^{やけあと}の煉瓦のうえに、

小便をすれば、しみじみ、

秋の気がする。

りんでん機、今こそ響け。
うれしくも、

東京版に、雪のふりいづ。

快く働かしめよ、
健かに眠らしめよ、と、
きょうも、いのれり。

西村陽吉

少年の日を憶う（一九二一年四月刊歌集『街路樹』より）

風船を

空に投ぐればひろがりし

少年の日のはろかなるかな

まことたのしく

我等の生きむ日は遠し

フリジアの花夜の灯に匂う

ロシアを憶う（同前）

人間のめざむる時といまはなりぬ
まことに生くる

今日とぞなりぬ

ある年の夏（同前）

我らみな

悉く現状に安んぜず

かくていつまで続かんとするか

擦り擦りて

火を発せざる小さき燐寸マツチ

その面を見て心のいたむ

金持に非ず

されど食うにも追われざる

このなまぬるき生活に飽く

秋風を知る（一九一六年七月刊歌集『都市居住者』より）

苛まれ

齒をむきだして啼く猿の
かなしきまでにこころよき面

街を行きて（一九一三年夏作）
（同前）

人間の言葉をまねし九官鳥の
やがて

みずからの声に鳴きたり

腕椅子（同前）

ほんとうに貧しくはたらかば
いかにしみじみと心なると
腕椅子に思える

身辺触目（同前）

まじめなるこの一室の戦いに
負けざらんとす
みな黙してはたらく

窓に倚れば

夕空あかく労働の

わが一日も終りけるかな

街樾の若葉（同前）

北上の川水みだし

四五人が馬洗い居り

啄木は亡し

ある印刷工場で
（一九二九年四月刊歌
集『晴れた日』より）

ストライキ 増俸要求の運動を 戯れのようだと言はいう
のか

どつしりと私の前を歩いてゆくこの職工の立派な足どり

日曜の電車で（同前）

革命をおもつ心に遠くいる どんたぐの日の電車の人ら

夕方の風景（同前）

むこうにはあんな原っぱもあるものを 町をつくって人は

住んでる

東京への往復（同前）

むきむきの人の心をのせた電車　ただ一すじに同じ方角に
走る

こう考える（同前）

週期的な不景気がくる当然さ　この夥しい商品を見ろ

冬とともに住む（同前）

朝霜がすっかり乾いた枯原に　いっばいに冬が来て住んで
いる

地をあるく（同前）

はたらかなければくえないからというはさびしい　はたら
くことによるこびがあれ

矢代東村

一とまわり、また一とまわりおもしろし、木馬はくるくる
まわるなりけり。（『生活と芸術』一九一三年十一月号）

ふとわれの君思ふ間に、手品師は水をば鳩にかえにけるか
も。（同前）

うち続く我が生活の貧しきに、つくづく手品のおもしろさ
かな。（同前）

雪の花（『生活と芸術』一九一四年二月号）

この頭、この思想、この生活、投げ出さねばならず、打壊
さねばならず。

雪よ雪よ、ふるもよけれど貧乏人の靴にしみるはかなしき
かなや。

野をゆけば野にうれいあり、町に入れば町にもあわき悲し
みのあり。

検束。

検束。

また検束だ。

しかし思え。検束しきれないものを

みなが持つてる。(『詩歌』一九二九年六月号)

広い――

広い――

小麦畑だ。コンバインだ。

快走するコンバインだ。

空は青いんだ。(『詩歌』一九三三年三月号)

ギガント農場は面積五十三万七百町歩とある

ずらりと並んだ

二百台以上もあるコンバイン。

青服の技手はみんな快活で。(同前)

ヴォロシーロフ工場の若いコンムニスト突撃隊

ハンマーを担いで。

上体をぐつと上にそらして。

包みきれない

喜びの色を

顔に漲らして。(同前)

「あつ、やられた。小林はやられた」と

夕刊を見た瞬間思わず

口に出していつてしまふ。(『詩歌』一九三三年五月号)

逮捕、急死、

急死、急死、急死。

ああ、それが何を意味するかは

いうまでもない。(同前)

東北の凶作について(『日本短歌』一九三五年一月号)

知事が見たって、

大臣が見たって、

実らない稲は実らない稲だ。

視察だという。

教室の隅に

袋を口にあてて何か食っている児童。

稗飯だ。

ぼろぼろな稗飯なんだ。

革手錠（『詩歌』一九三五年三月号）

飯を食うにも

革手錠は、そのまま。

食器にぐつと

顔を押しつけて食うさまを

思つてみろ。

飯を食うにも

糞をひるにも

革手錠。

革手錠のまま寝、

革手錠のまま起き。

これは

目に見える革手錠だ。驚くな。

目に見えぬ革手錠を

忘れるな。皆。

被告接見（一九三五年五月刊歌集『世紀の旗』より）

編笠を

とるなり「やあ」と元気よく

挨拶する被告だ
押され気味になる。

東北の凶作について（同前）

児童らは

今日も蝗とり

先生につれられて今日も蝗とり

その蝗が君は

何になると思ふ。

牡丹の花（『日本短歌』一九三五年六月号）

大輪の

濃い紅の牡丹の花。

咲ききわまれば

葉も花も

静か。

あたりに

光をみだす牡丹の花。

風がふけば

風に